D. H. ロレンスとアメリカ原住民

―― 異文化世界を理解する手掛かり ――

後藤　眞琴
（人文学部人間文化学科言語表象論コース）

D. H. Lawrence and Native Americans

Makoto Goto
(*Department of Language and Representation, Faculty of Humanities and Economics*)

ヨーロッパキリスト教文明の知は人間の存在をいびつにするものであるとして、D. H. ロレンス（David Herbert Lawrence）がヨーロッパキリスト教文明を批判・告発していることはよく知られていることである。彼によれば、ヨーロッパキリスト教文明の知の根幹を成しているのは人間の存在＝精神的存在＋肉体的存在と捉えて、これら二つの存在を分離し、精神的存在に特権を与えて精神的存在による肉体的存在の抑圧システムの構築をめざすものである。ヨーロッパキリスト教文明を捉える彼の視座は、例えば、その文明の歩みを批判する次のような言説に明確に示されている。

> 人間は四千年間一連の観念を蓄積し、その一連の観念を人間の根源の意識である古きアダム（old Adam）を抑圧するのに利用してきた。肉体、根源の意識、大いなる感応的な生の流れ、古きアダムの絶えることのない炎、それは悪であり征服されなければならない。これこそ紀元前二千年以来人間が作り出してきたすべての観念の女王蜂である[1)]。

上に引用したロレンスの言説で使用されている＜古きアダム＞(old Adam）の比喩は、ヨーロッパキリスト教文明の文脈においては＜人間の罪深い状態あるいは性質＞を意味するものである。彼はその意味を逆転させて、＜古きアダム＞＝＜人間の根源の意識＞として価値観の転倒をはかる。＜肉体＞＝＜根源の意識＞＝＜大いなる感応的な生の流れ＞＝＜古きアダムの絶えることのない炎＞という捉え方に示されているように、彼にとっては＜肉体＞は観念を生み出す＜精神＞と対立するものではない。＜肉体＞は人間の根源の意識として＜精神＞ならびに精神の産み出す＜観念＞の基盤を成すものである。

ロレンスがヨーロッパキリスト教文明の知に取って代わるべき知の手掛かりを求めて、キリスト教以前の古代異教徒の文明、エトルリア人の文明、アメリカ原住民の文化に共感を示していることは周知のことである。『アポカリプス論』（*Apocalypse*）のなかで彼がよみがえらせようとしているキリスト教以前の古代異教徒の文明世界も、『エトルリアの遺跡』（*Etruscan Places*）に描かれているエトルリア人の文明世界もこれらの文明を創造し享受した人たちは歴史の流れのなかで消え去った人たちである。アメリカ原住民の文化はスペイン人による征服以来ヨーロッパキリスト教文明の影響のもとに変容しながら、アメリカ原住民が今なお継承している文化である。

『アポカリプス論』で論じられるキリスト教以前の古代異教世界に関するロレンスの言説は、『聖書』の研究書や古代異教世界の研究書に負うところが大きい。エトルリア文明世界に関する彼の言説はエトルリア人の墓に残されている壁画に触発されてのことである。アメリカ原住民の世界・文

化に関する彼の言説はアメリカ原住民およびその文化にじかに接した体験に基づくものである。いうまでもなく、彼はヨーロッパキリスト教文明の世界のなかに生まれ、そこで成長し、教育を受け、自分を育てた文明を批判的に見るようになったイギリス人である。ヨーロッパキリスト教文明を批判する彼にとって、アメリカ原住民の世界はどのようなものであったのか。本稿ではロレンスの最初のニュー・メキシコ滞在期間中の体験から産み出されたアメリカ原住民の世界に関する彼の言説を中心に考察することによって、異文化世界を理解する手がかりを探りたい。そのためにはまず彼がニュー・メキシコ州のタオス（Taos）に行くことになった経緯を見ておく必要があるだろう。

I

第一次大戦後ヨーロッパに渡ったロレンスは、どこへ行ってもそこに落ち着いて長い間住んでいることはできなかった。第一次大戦後ヨーロッパに渡ってから1922年２月にヨーロッパから脱出するまでの彼の手紙を一読してわかるように、その基調を成しているものの一つはヨーロッパに対する幻滅感、そこから脱出したい、しなければならないという切迫感、そしてアメリカに希望の光を見出そうとしていることである。しかし、彼に確固とした将来の計画があったわけではない。彼の当時の心情は、例えば、次のような手紙から察せられる。＜ここにニュー・ヨークのロバート・モンシェ（Robert Mountsier）という友人がやって来た。彼は冬には是非ニュー・ヨークに来て講演をしてくれるようにと言っていた。しかし、彼と毎日会っていたらヤンキーがとてもきらいになって、さし当たってはとても行く気になれない。いつかは行くだろうと思う。ここヨーロッパでは神経がこんなにいらいらするので。アメリカに行くことが唯一の解決策のように思われる。しかし、それは最後の手段だ＞[2]。この手紙は1921年８月９日に書かれたものである。この時彼はオーストリア、ツェル・アム・ゼー（Zell-am-See）にある妻フリーダ（Frieda）の妹ヨハンナ（Johanna）の別荘に滞在していた。

アメリカに対するロレンスの関心は第一次大戦中にフロリダに彼の希求する理想社会「ラーナーニム」（Rananim）を創設しようと真剣に考えた時以来強くなっていた[3]。アメリカに対する彼の強い関心から産み出されてきたのが、第一次大戦の終わり頃に書き上げられた『古典アメリカ文学研究』（*Studies in Classic American Literature*）の最初の版である[4]。ヨーロッパに幻滅した彼がアメリカに希望を託すようになったのは、トマス・セルツァー（Thomas Seltzer）というロシア文学の翻訳者でもある出版者及びアメリカでロレンスの代理人となったジャーナリストの前述した手紙に述べられているロバート・モンシェとの親交によるところが大きい。ロレンスの作品はこれら二人の尽力でアメリカで最初に出版されることが多くなり、アメリカの出版社から彼の得る収入は次第に多くなっていた。

セルツァーは1920年６月にロレンスの戯曲『一触即発』（*Touch and Go*）をアメリカで出版したあと、その年の11月に小説『恋する女たち』（*Women in Love*）を予約者だけに販売する私家版を出版した。それまではイギリスの出版社は1915年に出版されて発禁処分となった小説『虹』（*The Rainbow*）の二の舞を踏むまいと『恋する女たち』には見向きもしなかったのである。ロレンスがヨーロッパを脱出するまでに、セルツァーはこれら二つの作品のほかに『精神分析と無意識』（*Psychoanalysis and the Unconscious*）（1921年５月）、亀の詩（*Tortoises*）（1921年12月）、『海とサルディニア』（*Sea and Sardinia*）（1921年12月）を出版した。セルツァーが『アーロンの杖』（*Aaron's Rod*）を出版するのはロレンスのヨーロッパ脱出後約一ヵ月半たった1922年４月14日であった。その後もセルツァーはこの時期のロレンスの主要な作品『無意識の幻想』（*Fantasia of the Unconscious*）（1922年10月）、『てんとう虫』（*Ladybird*）（1923年３月）、『古典アメリカ文学研究』（1923年８月）、『鳥・けもの・花』（*Birds, Beasts and Flowers*）（1923年11月）等をアメリ

カで出版した。こうしてロレンスは作家を職業とするものとしてアメリカの出版社から得られる収入で第一次大戦中にイギリスで嘗めた経済的に苦い経験をしないですむようになったのである（iv. v）。

ロレンスがヨーロッパに対する不満を募らせ、そこから脱出する決心を固めたのは、それは次のようなことが相次いで起こったことによる。その一つはロレンスの作品をめぐる問題であった。『恋する女たち』の普及版がイギリスのマーティン・セッカー（Martin Secker）社から1921年6月に出版された。その小説の登場人物の一人であるハリディ（Halliday）のモデルにされたフィリップ・ヘースルタイン（Philip Heseltine）は第一次大戦中にロレンスと親交を深め、ロレンスを崇拝するほどであったが、彼はその年の9月2日に名誉毀損罪で訴訟を起こすと弁護士を介してロレンスを脅かし始めた[5]。半月後の9月17日には『ジョン・ブル』（John Bull）誌が『恋する女たち』を猥褻罪で発禁処分にすべきであるという副編集長W.チャールズ・ピリー（W. Charles Pilley）による告発文を発表した[6]。さらに、1921年6月に書き上げられた小説『アーロンの杖』はイギリスでの出版を拒否された。

もう一つは親交を深め始めたブルースター夫妻（Earl and Achsah Brewster）がヨーロッパを去り、セイロン（Ceylon, 現在のSri Lanka）に向かうことが間近に迫ってきたことである。ブルースター夫妻はヨーロッパに在住していたアメリカ人の画家で、アール・ブルースターは東洋哲学の研究者でもあった。ロレンスはカプリ（Capri）島に1921年4月15日から19日まで滞在していたときブルースター夫妻に会い、意気投合した。その時以来ロレンス夫妻はブルースター夫妻と一人娘のハーウッド（Harwood）と大の仲良しになった。ブルースター夫妻はロレンスに敵対するようなことはなく、ロレンスの方でも彼らに向かって怒りをぶちまけるようなことはなかった。ブルースター夫妻は生涯ロレンスの友人であり、彼のよき理解者であった。ロレンスが結局セイロンに行き、その後オーストラリア経由でアメリカに渡ることに決めたのも、彼らの勧めに従ってのことであった。

＜ヨーロッパでは僕の心、僕の魂は打ちひしがれたままだ。ヨーロッパは何の役にも立たない、僕とヨーロッパをつなぐ糸は切れてしまったのだ＞(iv. 90)、とロレンスがブルースター夫妻にヨーロッパと決別する決意を述べたのは1921年9月29日のことである。しかしながら、その後数ヵ月の間彼はアメリカに直接行くか、ブルースターの滞在しているセイロンに行った後でアメリカに渡るか、彼の心は揺れ動いていた。1921年11月2日に彼はまずセイロンに行きたい旨をアール・ブルースターに知らせた（iv. 110)。その3日後の11月5日に、アメリカ、ニュー・メキシコ州のタオスに住むメイベル・ドッジ・スターン（Mabel Dodge Sterne）という女性からの手紙がロレンスのもとに舞い込んできた。彼女は彼に滅びつつあるアメリカ原住民の魂、その生活を書き留めてほしいとタオスに来るよう懇請し、家その他生活に必要なものの提供を申し出たのである。彼はこの誘いを受ける前にタオスのことは聞いたことがあり、その写真を見たことはあるものの、その場所についてはほとんど知らず、彼女のことはまったく知らなかった。しかし、彼は＜タオスに行きたい＞(iv. 111)、＜一月か二月にここから立つかもしれない。タオスに行こうと思います＞(iv. 111)、＜ヨーロッパから離れたい。その一歩を踏み出したい。それはタオスだろうか＞(iv. 111)と一抹の不安を感じながらも、彼女の招待に応じる返事をその日のうちに書き送った。

メイベル・ドッジ・スターンはニューヨーク州バッファロー（Buffalo）の裕福な家庭に1879年に生まれた、ロレンスより6歳年上のフリーダと同じ年であった。彼女は二度目の夫である建築家エドウィン・ドッジ（Edwin Dodge）の援助を受けて1905年頃から1912年にかけてフィレンツェで前衛的な作家、音楽家、俳優たちのパトロンとしてサロンを開いた。彼女がパリに住んでいたアメリカの女流詩人・小説家のガートルード・スタイン（Gertrude Stein）とその兄レオ（Leo

Stein）と知り合ったのはこの時期である。ロレンスがタオスのことを聞き、その写真を見たのはフィレンツェ近くに住んでいたレオからで、それは1919年遅くのことであった。最初の夫との間に生まれた一人息子の教育のために1912年にアメリカに帰ってまもなく、彼女はニュー・ヨークの五番街の自分のアパートでサロンを開いたり、左翼の政治活動に関心を示し、労働者のストライキを支援したりした。五番街の彼女のサロンにはアナーキストの指導者エマ・ゴールドマン（Emma Goldman）や『大衆』（*Masses*）誌の編集長で当時強い影響力を持っていたマックス・イーストマン（Max Eastman）なども出入りしていた。彼女は『世界を揺るがした十日間』（*Ten Days which Shook the World*）の著者として有名なジョン・リード（John Reed）と協力して、1913年6月7日に行われたニュー・ジャージ州パタソン（Patterson）の絹織物労働者のデモ行進を支援したりもした。また彼女はリードとの関係も公に始めたりもした。1916年にドッジと離婚したとき、彼女の次の結婚相手はリードではなく、画家のモーリス・スターン（Maurice Sterne）であった[7]。

アメリカ原住民及びその生活を描くためにニュー・メキシコに移り住んだスターンに感化されて、彼女はニュー・メキシコ州のサンタ・フェ（Santa Fe）の夫のもとに移り住むことにした。彼女は1917年12月にサンタ・フェにやってくると、そこに確立されていたイギリス系アメリカ人の知的社会とそりが合わなくて、夫のモーリスに無理を言ってタオスに家を6ヵ月間借りさせた。タオスにもサンタ・フェほどではなかったがアメリカ原住民の生活に共感し、新たな生活を求めようとしていた芸術家たちを中心とする人たちが移り住んでいた。6ヵ月後にモーリスがタオスから去って行っても、彼女は留まりトニィ・ルーハン（Tony Luhan）との関係を続けていた。ルーハンはタオスのプエブロインディアンで大工であった。メイベルはプエブロインディアンの最大のコミュニティのある居留地の端に大きなアドービィれんが造りの家を建て、その近くにもう一つ小さなアドービィれんが造りの家を持っていたが、それらの家を建てたのはルーハンであった。小さい方の家がロレンス夫妻に提供されたのである[8]。

メイベル・ドッジ・スターンはタオスに移り住んでからはニュー・ヨークやヨーロッパの生活に背を向けて、タオスを活動の拠点としてアメリカ原住民文化の保護と発展に生涯を献げようとしていた。彼女は恐らくロレンスのエッセイ「アメリカよ、お前自身の声に耳を傾けよ」を読んで、彼の考え方に共鳴したのではないかと思われる[9]。彼はこのエッセイをアメリカの週刊評論雑誌『ニュー・リパブリック』（*The New Republic*）に発表し、アメリカ人たちにヨーロッパ文化、特にイタリア文化をありがたがるのを止めて、＜アメリカインディアン（Red Indian）、アステカ族、マヤ族、インカ族＞の声に耳を傾けるように訴えているのである[10]。彼女は1921年10月及び11月に『ダイアル』（The Dial）誌に掲載された彼の『海とサルディニア』の抜粋を読んで対象を捉える彼の鋭い感受性、想像力及び描写力に感銘し、彼にアメリカ原住民とタオスの風景を描いて貰おうとしたのである。ロレンスはペンの力によってアメリカ原住民文化の保護と発展に寄与できるとメイベルは確信して、タオスに来るよう懇請したのである。彼は彼女に最初に約束した通りには1922年1月か2月にアメリカにまっすぐ向かわなかったものの、アメリカ原住民の生活、太陽及び自然の力を崇拝するアメリカ原住民の宗教、タオスの風土、そういったものについての彼女の説明に彼なりの理解をし、彼女の招きに応じたのである。ロレンスは1922年2月26日セイロンに向かってナポリを出港し、オーストラリア経由で＜このうんざりするほどみてくれだけの白人の世界では得られないものを、あなたのアメリカ原住民たちから得られるのを切に望んでいます＞(iv. 252) と、1922年9月4日にサン・フランシスコに上陸するや4日後の9月8日にはタオスに向かったのである。

II

アメリカ原住民についてのロレンスの印象はどのようなものであったか。それはタオスで書かれ

た手紙のなかにも述べられているが、そこに見られるアメリカ原住民に関する彼の言説は初めての体験にとまどい判断つきかねての彼の観察によるアメリカ原住民に関する事実を断片的に述べているだけである。アメリカ原住民についてのロレンスの印象を考察するには、タオスで書かれたアメリカ原住民に関する一連のエッセイ、「アメリカ原住民たちと一人のイギリス人（'Indians and an Englishman'）、「タオス」（'Taos'）、「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」（'Certain Americans and an Englishman'）によるのが妥当であろう。これら三編のエッセイは「プエブロと一人のイギリス人」（'Pueblos and an Englishman'）という1923年10月末までには書き上げられていたエッセイを三つに分割してそれぞれに訂正を加えたものである。三つに分割された主な理由はこのエッセイのテーマの一つになっていたバーサム法案（Bursum Bill）（アメリカ原住民の土地保有権に関する法案、後述）に関わることであった。バーサム法案は1922年12月には下院で審議されることが予想されていたが、そのエッセイは『ダイアル』誌にその年のクリスマス以降にしか掲載されないことがわかった。それでロレンスはバーサム法案に反対する論説の部分を切り離して下院での審議に合わせて発表することにしたのである[11]。

エッセイ「アメリカ原住民と一人のイギリス人」は1922年9月14日から18日にかけてヒカリリャ・アパッチ居留地（Jicarilla Apache Reservation）に連れて行って貰ったあとで書かれたものである。37才の誕生日の夜初めてタオス入りしたロレンスは三日後にアメリカ原住民の文化に接することになったのである。ヒカリリャ・アパッチ居留地はタオスの北西約160kmほどのところにある。トニィ・ルーハンともう一人のアメリカ原住民はそこで毎年9月14日と15日に行われるヒカリリャ・アパッチ収穫祭（Jicarilla Apache Harvest Festival）[12] に出かけようとしていたとき、メイベル・ドッチ・スターンに勧められてロレンスとベシィ・フリーマン（Bessie Freeman、そのときメイベルの家に滞在していた彼女のバッファロー時代からの友人）を自動車に同乗させて行くことになったのである[13]。

このエッセイはニュー・メキシコに初めてやってきたイギリス人ロレンスの体験を月に降り立った一人のイギリス人の体験に喩えることから始められている。この冒頭の一節はニュー・メキシコ、そこに生活する人々、及びアメリカ原住民に関するロレンスの捉え方の基盤を成しているものを象徴するもののように思われるので、説明の都合上原文のまま引用しておくことにしたい。

> Supposing one fell onto the moon, and found them talking English, it would be something the same as falling out of *the open world* plump down here in the middle of America. 'Here' means New Mexico, the Southwest, wild and woolly and artistic and sage-brush desert[14]. （イタリックは筆者）

ロレンスはヨーロッパ文明を呪い、ヨーロッパからの脱出を願いセイロン、オーストラリア経由で紅海、インド洋、太平洋を渡ってアメリカ大陸にやってきたイギリス人である。その意味では彼は 'the open world' ＝＜広々とした世界＞からやってきた人間である。しかしながら、彼はヨーロッパ文明世界を＜閉じた世界＞と断じて、'the open world' ＝＜開かれた世界＞をめざしてニュー・メキシコにやってきたイギリス人である。ロレンスにとってニュー・メキシコ＝ 'the Southwest, wild and woolly and artistic and sage-brush desert' は 'the open world' ＝＜開かれた世界＞に通じているべきであったのである。'artistic' の意味をサンタ・フェやタオスの芸術家グループの芸術という狭い意味に解すると、彼はそれらのグループに属する人たちを批判的に見ていたので、'artistic' は＜閉じた世界＞に通底するマイナスのイメージをもたらすことになる。しかし、広い意味に解すると 'artistic' はヒカリリャ・アパッチ収穫祭の夜に彼がその祭りを見に着て出か

けて行ったナバホ・ブランケットを織る技術を創造したアメリカ原住民の文化を意味することになり、‘artistic’は<開かれた世界>＝‘the open world’に通底するプラスのイメージになる。ロレンスはニュー・メキシコで‘the open world’＝<開かれた世界>というものをニュー・メキシコの現実の世界と対置させ、‘the open world’＝<開かれた世界>というものにニュー・メキシコの現実の世界を<閉じた世界>に転化させ、そこに閉じ込める作用をさせるのである。彼にそのようにさせるのはニュー・メキシコ＝‘the Southwest, wild and woolly and artistic and sage-brush desert’＝‘the open world’＝<開かれた世界>というヨーロッパ文明、特にイギリス・アメリカ文学を通して培われたアメリカ西部についての観念である。

アメリカを一つの場所としてよりは一つの観念として、つまり<新しい世界>、<自由の国>、<エデンの園>、<自然のままの野生の地>、<高貴なる未開人の住むところ>として描いてきたイギリス文学の特徴を強調しているのはW. K. バックリィ（Buckley）である[15]。ロレンス自身はアメリカ文学から彼の受けた影響について次のように述べて、その影響のもとにあることを認めている。<イングランドに生まれ、フェニモア・クーパー（Fenimore Cooper）によってアメリカ原住民に関する興味をかき立てられたので、私の心にはそれ（＝ヒカリリャ・アパッチ収穫祭の場）は‘wild and woolly West’ではなかった>(I E 94)。

ニュー・メキシコの現実の世界がロレンスの抱く観念であるニュー・メキシコ＝‘the Souwest, wild and woolly and artistic and sage-brush desert’＝‘the open world’とはかけ離れた異質の世界であることを、彼は痛感する。そして彼はニュー・メキシコの現実の世界のなかで部外者であり、「孤独な寄るべのないイギリス人」(a lone lorn Englishman)（I E 92）であることを強烈に意識する。その意識のなかでニュー・メキシコの現実の世界はニュー・メキシコについて彼の抱く観念である‘the Southwest, wild and woolly and artistic and sage-brush desert’＝‘the open world’と対置させられることによって、<きわめて厳粛に演じられるコミックオペラ>(comic opera played with solemn intensity)（I E 92）の世界、<まじめな仮装舞踏会>(a masquerade of earnestness)（I E 93）の世界に転化され、そこに閉じ込められる。ニュー・メキシコの現実の世界のなかでそれぞれの生き方をしている人々は、ロレンスにとって各自の役を気ままに演じている人々でしかなくなる。ニュー・メキシコの現実の世界は‘wild’で‘woolly’部門を担当する人々、芸術部門を担当する人々、インテリ階級部門を担当する人々、自動車に象徴されるアメリカ機械文明部門を担当する人々、メキシコ人部門を担当する人々、アメリカ原住民部門を担当する人々、こういった人々が気ままに演じる舞台に転化されるのである。彼らは皆それぞれ自分のしていることが笑劇であることを知りながら、笑劇として演じることを拒んでいる人間でしかなくなるのである（I E 92-93)。

ニュー・メキシコの現実の世界を<極めて厳粛に演じられるコミックオペラ>、<まじめな仮装舞踏会>と捉えるロレンスの視座は、<私がほんとうに見た最初のアメリカ原住民はこの州のアパッチ居留地のアパッチであった>(I E 93）に続く次のようなヒカリリャ・アパッチ収穫祭を見に行く途上の叙景描写の中にも示されている。<私たちは自動車で砂漠を越え、メサを越え、いくつものキャニオンを下り、いくつもの分水嶺を上り、アロヨに沿ってやって来た。二日かかった。午後になると私たちの二人のアメリカ原住民の男は車を道のわきに寄せ、松の木の下に座って長い黒髪を梳いて、それを編んで二本のお下げにして肩の前に垂らした。そして彼らは銀とトルコ石で作った装身具をすべて身につけ最上のブランケットを身にまとった。私たちはそこ（＝祭りの場）に近づいていたからである>(I E 93)。この時ロレンスはプエブロインディアンであるトニィ・ルーハンの運転するメイベル・ドッジ・スターン所有の車で出かけたのである。アメリカ原住民である二人の男は収穫祭に参加するためにアメリカ原住民の粧いを凝らしたのであった。ロレンスにとって

は彼を連れていった二人のアメリカ原住民はアメリカ原住民ではなかったのである。ロレンスが見た最初のアメリカ原住民であるアパッチの人々の世界も＜イングランドに生まれ、フェニモア・クーパーによってアメリカ原住民に関する興味をかき立てられた＞ので、彼の心には‘wild and woolly West’＝‘the open world’ではなかったのである。ロレンスにとってアメリカ原住民とは特にイギリス・アメリカ文学によって培われた彼の心を満たす‘wild and woolly West’＝‘the open world’に住む人間でなければならなかったのである。ロレンスにとってアメリカ原住民は前述したエッセイ「アメリカよ、おまえ自身の声に耳を傾けよ」に示されているように、‘Red Indian’であり、＜アステカ族、マヤ族、インカ族＞であり、偉大な文明を創造した人たちの子孫でなければならなかった。

日が沈むと鳴り出した弱強二拍子の太鼓の音にロレンスは血漿に達するものを感知するが、アパッチの踊り手たちの歌声と叫び声に慣れて彼がその声から聞き取ることのできるものは、それは人間性とはしゃぎの底にある嘲笑いと人間の最大の楽しみである鬨の声である。このように感じたことに対して、ロレンスは＜私はまったく間違っていたかもしれない。他の人々ならもっともっと自然な、もっともなものを感じるのかもしれない。しかし、そのように私は感じたのだ＞(I E 95) と、ヨーロッパ文明のなかに生まれ育った自分の感性の限界を認めながらも、自分にとっての自分の感性の重要性を強調する。しかしながら、アメリカ原住民に対するロレンスの感性はイギリスに生まれてフェニモア・クーパーによってかき立てられ形成されてきたものである。実際に目にし、耳にするアメリカ原住民のものを彼の感性が捉えるのは、アメリカ原住民の世界＝‘the wild and woolly West’というアメリカ原住民に関する観念に基づいているのである。彼はアパッチの人々の集団からしてきた＜耐えられない硫黄のような人間の臭い＞(I E 95) に対しては、＜アパッチの人々は宗教的に水を嫌悪する。彼らは体も衣服も決して洗わないのだ＞と理解ある態度を示す(I E 95)。それはその臭いがアメリカ原住民の世界＝‘the wild and woolly West’という観念のなかに収まるからなのである。一方、ロレンスは上等のナバホ・ブランケットをまとって独りで夜アパッチの人々のキャンプ地を歩きながらバドヴァイザービールやグレープジュースを売っているアメリカ原住民の男を見たり、彼を見つめながら通り過ぎるアメリカ原住民を見たりしているとき、空中に＜あざけっている意地の悪い震え＞(a jeering, malevolent vibration) (I E 96) を感知する人間でもある。この時彼の目にしているアメリカ原住民が‘the wild and woolly West’の住人ではないことは、バドヴァイザービールやグレープジュースの言及から明らかである。

アパッチ以外の人は入れないと注意を受け、儀式を行っている集会場の入り口近くに立って中の様子を見つめるロレンスは、話し続けるように朗読を続けている一人の年老いた男に注視し、その男の声、表情に哀れを誘うものがあるのを感知する。その年老いた男の正装をロレンスの目はしっかりと捉えている。一方、彼の目は儀式に参加しているアメリカ原住民の男たちのなかにチューインガムをかんでいるもの、パンを食べているもの、巻きたばこを吸っているもの、アメリカ人のように既製品のシャツ、ズボン姿のものがいることを見逃さない。一人の年老いたアパッチの男に引き付けられるロレンス、アメリカ人のような服装をしているアパッチの男に反発するロレンス、アメリカ原住民に対する彼の態度は相反する感情の複合体である。それは＜イングランドに生まれ、フェニモア・クーパーによってアメリカ原住民に関する興味をかき立てられた＞、特にイギリス・アメリカ文学によって培われてきたアメリカ原住民に関する彼の観念に由来するものである。

アメリカ原住民の世界＝‘the wild and woolly West’＝‘the open world’というロレンスの観念はアメリカ原住民とロレンス自身との関係についての捉え方にも反映されている。彼はアメリカ原住民と彼自身の間に共通項があると信じている。その共通項ははるか昔の人類の起源にまで遡るものであり、彼の血のなかにも彼らの血のなかにも流れていること、そのことを彼は認めている。

しかし、彼は意識を有する人間として彼らのところには戻りたくないと感じている。彼は彼らを否定したくもないし、彼らとの関係を絶ちたくもないと感じている一方で、彼らの所に戻ることはできないと考えている。彼は儀式を行っているアメリカ原住民と彼自身（＝イギリス人＝ヨーロッパ人）との間に越えることのできない溝があることを感じている。しかし、彼はその溝を越えることを願っているのだ。彼の願いは自分の方から彼らの所へ戻ることができたら、そのことによってほんとうに達成されるのか。なぜ彼の方が戻らなければならないのか。彼らの方が彼の方に来ることの可能性は考えられないのか。彼と彼ら双方が相手の方に近づき合う方法はないのか。アメリカ原住民の方にロレンス自身が戻ることだけを問題にしているのは、それはアメリカ原住民の世界＝'the wild and woolly West'＝'the open world' という観念に囚われているからなのである。

Ⅲ

タオスでアメリカ原住民と接するようになって、ロレンスは彼らに関してどのように感じているかを知るにはもう一つの重要なエッセイがある。それは「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」というエッセイである。前述したように「タオス」（ヒカリリャ・アパッチ収穫祭見学後10日ほどしてタオス・プエブロ（Taos Puebro）でおこなわれた収穫を祝うサン・ジェロニモ祭（San Geronimo fiesta）を見た後で書かれたもの）[16] というエッセイもあるが、このエッセイは「アメリカ原住民たちと一人のイギリス人」、「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」よりも短いもので、そこでは彼の体験したことが簡潔に報告するように述べられているだけである。

エッセイ「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」はバーサム法案に反対であるというロレンス自身の意見を表明するために書かれたものである。バーサム法案とはアメリカ原住民の集落（pueblo）内およびその周囲にある土地の保有権に関する複雑な問題を解決する目的でニュー・メキシコ州の上院議員 H.O.バーサム（Bursum）によって1922年７月20日に議会に提出されたものである。ロレンスはどうしてこのエッセイを書くようになったのか。その経緯について見ておくことは、このエッセイの理解を深める上で必要なことのように思われる。

メイベル・ドッジ・スターンはアメリカ原住民文化の保護と発展のために、社会改革者でアメリカ原住民の諸権利獲得のために活動していたジョン・コリア（John Collier、ローズベルト（Franklin Delano Roosevelt）大統領の下でアメリカ原住民局の局長を務めた）をタオスに呼び寄せていた。バーサム法案はアメリカ原住民の土地を略奪し、アメリカ原住民の集落を解体し、アメリカ原住民をアメリカ人化させるものであると考えていたコリアはメイベルにバーサム法案の危険性を強調した。社会改革者であるコリアは共同生活体を構成し、機械に頼らない生活を続けているプエブロインディアンの伝統的な生活様式に機械化された文明社会の弊害を改革する手掛かりがあると思っていた。この点ではヨーロッパからの脱出を願うロレンスと共通するものがあった。メイベルがバーサム法案に反対する全国的な組織つくりに乗り出したのは1922年９月ころで、それはロレンスのタオス到着と重なり合っていた。彼女はニュー・ヨークの以前の仲間たちの協力も得て、バーサム法案に反対する署名活動を全国的な規模で展開した。「バーサム法案に反対する芸術家と作家たちの抗議書」（Protest of Artists and Writers Aqainst the Bursum Bill）に署名した人たちのなかには、シカゴの詩人ハリエット・モンロー（Harriet Monroe）やカール・サンドバーグ（Carl Sandburg）、小説家のゼイン・グレイ（Zane Grey）、詩人・小説家のエドガー・リー・マスターズ（Edgar Lee Masters）などがいた。ロレンスもこれに署名し、そして「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」を書いたのである。このエッセイは1922年のクリスマスイヴにニュー・ヨーク・タイムズ・マガジン（New York Times Magazine）に掲載され、バーサム法案は翌年の１月に廃案となった[17]。

エッセイ「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」はバーサム法案成立後のイギリス系アメリカ人とスペイン系アメリカ人との間に繰り広げられる土地をめぐる争いのすさまじさを警告したあとで、<それが外国人であり新来者である私に何の関係があるのだ>[18]で終わっていることに示されているように、ロレンスはこのエッセイにおいても部外者であることを強調している。イギリス人である彼は<バーサム法案が私にとって愉快なのはその厚かましさ――ずうずうしい冗談にある。その法案が法律になるかもしれないとわかったらどんなイギリス人でもちょっとはびっくりする>(C E 242) と、アメリカ人に対してイギリス人の優越性を皮肉を込めて見せたりもするのである。彼はエッセイ「アメリカ原住民たちと一人のイギリス人」におけるように、バーサム法案に反対、賛成する人たちの繰り広げる舞台劇を見ている一人のイギリス人の観客者の立場を堅持しようとする。

エッセイ「あるアメリカ人たちと一人のイギリス人」でロレンスは確かにバーサム法案のアメリカ原住民に与える打撃をその条項に読み取って、この法案に反対している。しかし、バーサム法案に反対する彼の力点は、このような法案を法律にしてアメリカ原住民を葬り去ろうとしているアメリカ白人たちに対する批判にある。つまり、バーサム法案に反対する彼はアメリカ白人たちにとってのアメリカ原住民の重要性をまったく理解できないアメリカ白人たちの愚かさを批判しているのである。それで、彼は部外者であり、しかもイギリス人であるという立場を利用してアメリカ原住民に関する彼自身の考え方をアメリカ白人たちに向かって積極的に展開していくのである。

<いとしいアメリカ原住民を、あわれなアメリカ原住民を愛し、アメリカ全部がアメリカ原住民の手に戻される日の来ることを待ち望んでいる白人の知識人たちは何をしようとしているのかわからない>(C E 240) と、ロレンスはまず白人知識人たちの行っているアメリカ原住民の諸権利獲得運動に疑問を抱いていることを明らかにする。彼はバーサム法案の成立によってアメリカ原住民の集落は解体され、アメリカ原住民はアメリカ経済を支える賃金労働者としてアメリカ社会のなかに組み込まれ、アメリカ原住民の白人化・アメリカ人化は一層押し進められ、アメリカ原住民の文化は亡び去るという白人知識人たちのバーサム法案に反対する理由をその法案の条項から読み取っている。しかし一方、彼はアメリカ原住民の集落に学校ができ、若者たちはみなアメリカ語を話し、集落を出て賃金労働者となっていく状況を目にして、<集落はゆっくり解体に向かっている>(C E 242)、それは宿命であるという捉え方をする。彼はその捉え方をもとに<アメリカ原住民に自然な死に方をさせよ>(C E 242) と主張するのである。彼の主張を支えているのは<アメリカ原住民の集落は今でもアメリカの生活の中心にある>(C E 243)、<アメリカ的であるのは今でもアメリカ原住民である>(C E 243) というアメリカ原住民に抱く彼の観念である。この観念は<アメリカ原住民は永遠なる火を、古い暗黒の宗教の聖なる火を点し続ける>(C E 243) というロレンス独特の言いまわしで、アメリカ原住民の不滅性＝肉体の意識による宗教の聖性という観念にもなる。アメリカ原住民に抱くロレンスの観念はⅡで述べたニュー・メキシコ＝ 'the Southwest, wild and woolly and artistic and sage-brush desert' ＝ 'the open world' という観念に通底するものである。

ロレンスはアメリカ原住民に抱く彼の観念に基づいて、<私たちはアメリカ原住民の視点にもう一度適応するようにしよう>(C E 243)、<私たちが私たち自身であることを忘れないで、彼ら（＝アメリカ原住民）が見るようにもう一度見るようにしよう>(C E 243) と主張するのである。<もう一度>をロレンスが強調しているのは、それは前述したようにアメリカ原住民と私たちは共通項を有する起源を持っているという観念に基づくものである。ロレンスの主張をそのまま受け入れることは容易ではない。彼がアメリカ原住民というとき、彼の意味するアメリカ原住民は彼の創り上げたアメリカ原住民についての観念に基づいているのである。アメリカ原住民についての彼の

観念はイギリスに生まれ、フェニモア・クーパーによって触発され、特にイギリス・アメリカ文学を通じて培われてきたものである。その観念に基づいてアメリカ原住民を見ることは、彼にとっては<私たちが私たち自身であることを忘れないで>見ることかもしれない。しかし、彼が彼の作品を通して強調しているように、私たち自身は他者との関わり合いを通して時々刻々変化しているものであり、変化している自分自身を意識することを人間として課せられてもいるのである。

アメリカ原住民について考えるロレンスは彼の創り上げたアメリカ原住民についての観念に基づいて考えている。ロレンスの前に現存するアメリカ原住民は彼の観念によって裁断されている。現実のアメリカ原住民がアメリカ原住民について抱く彼の観念に作用してはいないのである。

Ⅳ

ニュー・メキシコ体験について述べたロレンスの次の言説はよく知られているものである。

> ニュー・メキシコは私のした外部の世界からの体験のうちでもっとも重要な体験であった。それは確かに私を永久に変えた。奇妙に聞こえるかもしれないけれど、現在の文明の時代から、つまり、物と機械の発展する大きな時代から私を解放してくれたのはニュー・メキシコであった……ニュー・メキシコの陽光の烈しく照りつける壮大な朝目覚めると、魂の新しい部分が突然覚醒し、新しい世界が古い世界に取って代わった[19]。

これは彼の「ニュー・メキシコ」（'New Mexico'）というエッセイのなかの一節である。このエッセイは1928年12月に書かれたものである。その時彼は二度目のニュー・メキシコ体験（1924年３月―1924年10月）を経てヨーロッパに戻り、フランスのバンドル（Bandol）に住んでいた。<それ（＝エッセイ「ニュー・メキシコ」）を書いていたらほんとうにそこ（＝ニュー・メキシコ）に戻りたくなってきた>[20]と述べているように、彼はこのエッセイを書いているときニュー・メキシコへのノスタルジアに駆られていたことも事実である。

しかし、彼は二度目のニュー・メキシコ体験によって自分が変えられたことを意識したのである。彼の最初のニュー・メキシコ訪問時には、ニュー・メキシコの体験によって彼に<魂の新しい部分が突然覚醒し、新しい世界が古い世界に取って代わる>ようなことはなかった。そのように意識するようになるためには時間と再度のニュー・メキシコ体験が必要であったということになる。

私たちが自分の生まれ育った文化圏とは異なっていると思われる文化圏で(国外は言うまでもなく国内においてもである)生活していて出会うさまざまな人々、事象、文化現象に関して自分の判断を下すとき、私たちはどのようにして判断するのであろうか。自分の生まれ育った文化圏の価値基準を判断基準とすることは慎まなければならないとしても、その時その文化圏について抱いている観念に判断基準を求めないだろうか。異なっている文化圏のある場所を訪ねるとき、その場所（人々、文化を含めて）について、自分の生まれ育った文化圏のなかで培われたその場所についての観念を持っていないということはあり得るのだろうか。その場所を訪ねてみたいという欲望があったとしたら、その欲望はその場所についての何らかの観念によってもたらされるものではないのだろうか。

このようなことを考えている私は自分が生まれ育った文化圏以外の文化を理解することはとても容易なことではないと思っている。それでヨーロッパ文明を呪い、ヨーロッパからの脱出を願って自ら選んでやってきたニュー・メキシコ、タオスでロレンスがアメリカ原住民をどのように捉えるのかを見てきたわけである。彼は最初のニュー・メキシコ訪問時にはニュー・メキシコに来る前に抱いていた観念に囚われている。<ニュー・メキシコの陽光の烈しく照りつける壮大な朝目覚める

と、魂の新しい部分が突然覚醒し、新しい世界が古い世界に取って代わった>というように意識することになる彼の二度目のニュー・メキシコ体験については稿を改めて考察して、異文化世界を理解する手掛かりをさらに探ることにしたい。

注

1) D. H. Lawrence, 'Introduction to Pictures', *Phoenix*, ed. Edward D. McDonaldo (London: Heinemann, 1967), p.769.

2) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. Ⅳ, Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1987), p.67. 以下引用は本書による。ivとして頁数を本文の括弧内に示す。

3) ロレンスの「ラーナーニム」に関しては、拙稿「第一次世界大戦初期のロレンス—ラナニム創設の夢 ——」(『東北大学教養部紀要』第42号) (1984) 43-61頁、拙稿「ラナニムを求めて —— 第一次世界大戦半ばのロレンス ——」(『東北大学教養部紀要』第44号) (1985) 113-131頁参照。

4) D. H. Lawrence, *The Symbolic Meaning: The Uncollected Versions of 'Studies in Classic American Literature'*, ed. Armin Arnord (London: Centaur Press, 1962), pp.1-11.

5) *D. H. Lawrence: A Composite Biography*, ed. Edward Nehls, 3 vols (Madison: University of Wisconsin Press, 1957-9), Ⅱ, pp.92-98.

6) *Ibid.*, pp.89-91.

7) David Ellis, *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), pp.58-9.

8) *Ibid.*, p.59.

9) *Ibid.*, p.58.

10) D. H. Lawrence, 'America, Listen to Your Own', *Phoenix*, pp.87-91.

11) David Ellis, *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930*, p.621.

12) Wayne Templeton, "'Indians and an Englishman' : Lawrence in the American Southwest", *D. H. Lawrence Review*, (Austin, Texas: University of Texas at Austin, 1996) Vol. 25, Nos. 1-3, p.16. テンプルトンの論文ではロレンスのニュー・メキシコ体験を二回に分けて論じてはいない。

13) David Ellis, *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930*, p.63.

14) D. H. Lawrence, 'Indians and an Englishman', Phoenix, p.92. 以下引用は本書による。ＩＥとして頁数を本文の括弧内に示す。

15) W. K. Buckley, 'D. H. Lawrence's Gaze at the Wild West', *D. H. Lawrence Review*, Vol. 25, Nos. 1-3, pp.35-38. バックリィの論文でもロレンスのニュー・メキシコ体験は二回に分けて考察されていない。

16) David Ellis, D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930, p.64.

17) Ibid., pp.64-65.

18) D. H. Lawrence, 'Certain Americans and an Englishman', *Phoenix* Ⅱ, eds. Warren Roberts and Harry T. Moore (London: Heinemann, 1968), p.243. 以下引用は本書による。ＣＥとして頁数を本文の括弧内に示す。

19) D. H. Lawrence, 'New Mexico', *Phoenix*, p.142.

20) *The Letters of D. H. Lawrence*, Vol. Ⅶ, Cambridge Edition (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p.94.

Key word : D. H. Lawrence, Native American, New Mexico.

平成10年(1998)年9月29日受理
平成10年(1998)年12月25日発行